

《その他》

ロンドン紀行

鳥居 修平

休暇を取り、ロンドンにいる娘家族に会いに行った。せっかくなのでナイチンゲールなどの看護・医療ゆかりの場所を訪れた。

ナイチンゲールは看護の世界ではしばしば登場する偉人であり、また女子小・中学生にとって人気の伝記の人である。彼女を有名にしたのはクリミア戦争での活躍である。当時の戦争では兵士達は戦死よりも病死の方がはるかに多いのが実態でした。そこで病棟を改善し看護の力で兵士達の病死を激減させた。彼女の銅像はロンドンの一番の繁華街であるピカデリー広場から少し南下した大通りの中央に立てられており、大きな銅像の台座の足もとには私が訪れたときでも花束が捧げられていた（写真1）。彼女が働いていたセント・トーマス病院は今でもあり、その病院はテムズ川をはさんでビッグ・ベンのある国会議事堂の対岸にある。その病院の一角にフローレンス・ナイチンゲール博物館がある。それは予想していたよりもこじんまりとしていて、少々物足りなかった。

ロンドンと言わずヨーロッパの街を歩くと至る所で様々な銅像が見られる。ロンドンの中心の広いトラファルガー広場には50mと高い円柱の上に大英帝国の象徴であるネルソン提督の像がある。彼はフランス・スペイン連合艦隊を破って大英帝国の繁栄の基礎を造った人である。そしてロンドンには大きな公園が市街地にくつももあり、その1つハイドパークは東京ディズニーランドの約3倍という大きさで、その中のイタリア庭園に、ジェンナーの銅像を見つけた。天然痘（痘瘡）の治療法である牛痘種痘法を見つけ、ひろめた医師である。天然痘（痘瘡）という疫病は人



写真1 ナイチンゲール像

類がこの地上から撲滅した唯一の病気であり、1980年にWHOが消滅を公式に宣言した。

帝国戦争博物館を訪れた。今年は第一次世界大戦開戦百周年としてヨーロッパの各地でいろいろな記念行事があった。日本では集団的自衛権の問題で戦争の記憶が語られているが、現実にはウクライナ内戦、イスラエルのガザ侵攻、イスラム国の人質斬首など戦争の火種は絶えない。「なぜ戦争はなくなるのか？」そんな疑問をもって博物館を訪れた。第一次世界大戦の特別展示、そして大英帝国の戦争の歴史、ホロコーストの展示がなされ、多くの見学者が訪れていた。この建物の前身はBedlam（ベドラム）精神病院（1815年設立）という、世界で最も古い精神病院の1つとして有名である。そんな場所を戦争博物館に改造するのは英国流のアイロニーか。ファサードには巨大な大砲が据え置かれていたが、建物の外を一回りすると、広い芝生に囲まれて病院を偲ばせる雰囲気も感じられた。第一次世界大戦での英国の軍人の死者数は88万8246人という。それを偲んで、死者と同じ数の陶器で作られた赤いポピーの花をロンドン塔の堀に植える「REMEMBERED」というイベントが行われていた。堀の緑の芝生の上に、赤い血が流れ出したような光景である（写真2）。血で塗られた伝説を持つロンドン塔に相応しいような刺激的なイベントであると思ってしまう。帝国戦争博物館では2冊の小冊子を購入した。1冊は第一次世界大戦の医療活動、もう1冊は第二次世界大戦における看護師の活動である。写真、図が多く状況が理解しやすい。看護、医学は不幸にも必然的に戦争に巻き込まれ、戦争、災害などで飛躍的に発展する。「人はなぜ平和に共存できないのか？」赤いポピーの花を見ながら考えてしまう。そういえば第一次世界大戦中犠牲になったイギリス人のエディス・キャベルという看護師がいた。ベルギーの病院で献身的に働いていたところをドイツ軍にスパイの容疑をかけられ、銃殺された。その後、彼女の死を悼んでトラファルガー広場に銅像が建てられ、医学書院の「看護史」にも写真が載っている。またカナダの国立公園の山に彼女の名が残された。今回その銅像を捜したが私は見つけることができなかった。

有名なハンタリアンミュージアムHuntaerian Museum、これは王立外科医師会の建物内にある医学博物館である。このコレクションのもとを築いたハンターの伝記、「解剖医ジョン・ハンターの数奇な生涯」が大変おもしろい。彼はドリトル先生、またジキルとハイド氏のモデルであるとも言われている。彼は近代医学にも大きく貢献した。いろいろな動物を郊外に飼い、比較解剖を



写真2 ロンドン塔の第一次世界大戦の死者を偲ぶ陶製のポピーの花のイベント

していた。また死体を墓場から掘り出し教材としていた。有名な展示品に巨人とシシリアの小人のコレクションがある。これをいかにして獲得したかも本に述べられている。

ロンドンには運河が走っており、ボート生活を楽しんでいる人もいる。運河沿いの小道を散歩し、パディントン駅にたどり着いた。あの「熊のパディントン」が拾われたところである。そこを通過して、街に入るとセント・メアリー病院St. Mary's Hospitalという病院が目飛び込んできた。由緒ありそうなたたずまいで見上げると、壁に「フレミング、ペニシリンを発見」と壁に刻み込まれていた。ペニシリンとは最初に発見された抗生物質で、1928年フレミングが細菌を培養中の寒天のうえに、青カビを見つけ、そのまわりだけ細菌が繁殖していないことから、偶然発見したのである。このペニシリンのおかげで重症の感染症から多くの人が救われた。しかし日本に入ってきたのは第二次世界大戦後であった。

ロンドンの印象は世界中に植民地を持った大英帝国の栄光と、そのついても持ち合わせている古い伝統の街といったところである。現在のロンドンの繁華街を歩けば、移民の姿も多く、インド人やバールをかぶったアラブ人などであふれかえっている。また私はつれられて、アルフィーズ骨董市、ポートベロー骨董市なども見た。よく賑わっているがその独特のにおいで気分が悪くなってしまったが、一方広々とした公園が市街地に多く、緑の芝生と、巨木が豊かに枝を広げており、気分を爽快にする。子どもと犬が自由に走り回り、伝統と公園がうまくバランスがとれているものだと感心した。まだまだ魅力のある街である。

帰りのスーツケースに詰めてきたものは、テムズ川で拾った白い石、キュー王室植物園に落ちていた松かさ、そして医療に関する本など、スーツケースは行く時よりも重くなった。